

# のう こう 農耕とかんがい①

## —かんがい—

大きな河川もなく、かんがい期の降雨量も少ない知多半島では、昔から稲作に必要な水を確保することに多くの努力を払ってきた。谷頭を利用して多くの溜池を作って田地へ水を引いたり、野井戸を掘り、はねつるべを使って水をくみ上げた。しかし、かんばつが続けばたちまち水は底をつき、収穫は激減するありさまであった。この水の苦しきも、昭和36年に通水した愛知用水によって、解消された。

### ●つるべ桶

水をくみ上げる道具。一方に重り石をつけることによって、テコの作用により水の入った桶を楽に持ち上げることができる。

この他に替桶といって、田よりも低い池や川から水をくみ上げるのに使用した桶がある。一人替え用と二人替え用がある。

### ●足踏水車

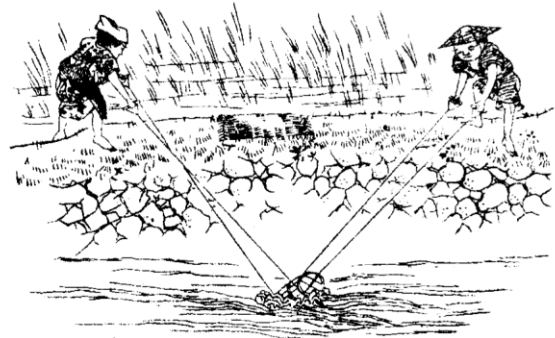
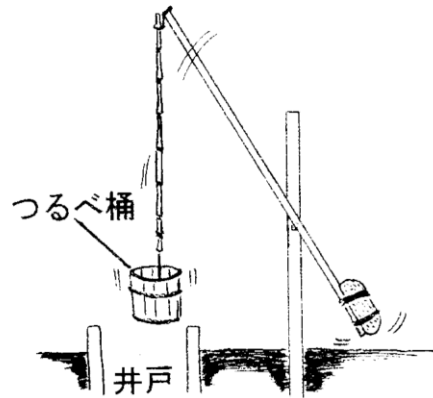
水路から田に水を入れるのに使う。足で水車の羽根を踏み、水車を回転させて、水をくみ上げた。

### ●荷ない桶

水を入れて運ぶ桶。桶を天秤棒の両端に担ぎ、運んだ。

### ●水かけ桶

天秤棒の両端にこの桶を担ぎ、畑に水をまいた。桶の底に細い棒の付いた栓があり、その棒を上下させ、栓を開けて水をまいた。歩きながら2列同時に水をまくことができた。



『農具便利論』より



『農具便利論』より

## のう こう 農耕とかんがい②

### しゅうかく ちょうせい — 収穫・調整 —

戦前までの知多市の農業は稲作が中心であった。また、知多半島は平地が少ないので、谷あいの底深い泥地帯までも水田として利用した。そのため、田船のような深田で使用する道具もみられた。

機械化されるまでの米作りは、馬や牛などの畜力によるもの他は、全て人力で行い、春の田起こしから秋の収穫に至るまでには、並々ならぬ苦労があった。

#### ● 鎌

稲などを収穫する道具。刃が薄いものやノコギリ状のものがある。

#### ● 田船

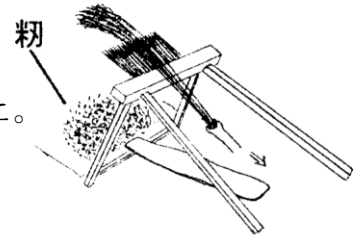
深田（湿田）で使ったもので、刈り取った稲が濡れないように、これに入れて畦道まで運んだ。

#### ● 千歯こき

脱穀用の道具で、歯に稲をかけて手前に引き、粃を取った。

#### ● 足踏脱穀機

千歯こきを改良したもの。足でドラムを回転させて粃を取った。足踏脱穀機を使うことで、作業効率が各段に上がった。



#### ● 箕

脱穀した粃を入れ、上下に振って風でワラ屑などのゴミを吹き飛ばした。竹製や藤製のものがある。ものを運ぶときにも使った。

#### ● 唐箕

箕の機能を機械化したもので、脱穀した粃を良質なものと屑米やごみに分ける道具。漏斗から粃を入れ、取手を回して風を起こし、軽い屑米やごみを飛ばす。良い米は、重いので漏斗の下にある口から落ち、それよりも劣る米やゴミは、横の口から出る。選別口が2口のものもある。

#### ● 万石とおし

とおし（網の目状のふるい）を改良したもので精米した米を選別する道具。小粒の米は途中で落ち、大粒の米は最後まで残る。

